

花川病院

症 例 概 要 患者 70歳代 女性

病名：病名：くも膜下出血

入院期間：A年B月C日 ～ D年E月F日

経過：A年G月自宅内で突然嘔吐し、意識がなくなり救急搬送される。同日、破裂脳動脈瘤SAHコイル塞栓術施行。H月水頭症に対するドレナージ並びに断続的な痙攣出現し重積状態に進展しICU管理となる。H月気管切開、LPシャント術、脳動脈瘤に対して追加塞栓術施行。状態落ち着きハビリ継続目的にてB月当院へ入院となる。

内 容

既往歴：右乳がんリンパ郭清術後、くも膜下出血術後

病前の生活：夫と長男の3人暮らし。過去2回くも膜下出血あったが、ADLは自立できており、家事はなるべく夫担うようにしていた。

当院での経過

入院時の様子は、覚醒状態JCS1群で、気管切開をしており、唾液や痰の量が多く、処理が頻回に必要であった。身体機能は両側に中等度の運動麻痺や拘縮、疼痛などを認め離床がすすまず、高次脳機能障害も認められていた。入院までの経過と現在の状態から、自宅退院は難しいことが予測されていた。

短期での明確な目標をたてて関わることで、3ヵ月程度経過頃より、スピーチカニューレでの会話が可能となってきた。さらに基本動作は自立、移動は歩行器使用して見守りレベル、階段昇降も軽介助で可能となった。痰も少なくなり、食事も3食経口摂取可能となった。在宅生活も可能と思われたが、ご本人とご家族共に不安が大きく悩まれていた。多職種で在宅に向けて不安を解消できるよう関り、自宅退院することができた症例である。

医師：全身状態の管理。早期から摂食訓練、スピーチカニューレでの発声練習への立ち合い。不安に対してご家族への現状の説明、自宅での注意点の助言実施。

看護師：観察・アセスメントの実施。生活の援助。病棟での摂食訓練を早期から実施。不安に対して、カニューレの衛生と体調管理の家族指導実施。

理学療法士：早期離床に向けて身体機能向上、特に体幹・頸部の安定を図る。不安に対して屋内移動の注意点指導と歩行補助具選定実施。

作業療法士：福祉用具の選定。食事や書字に向けて上肢機能訓練の実施。不安に対して、日常生活動作指導と、介助指導実施。

言語聴覚：コミュニケーション能力向上に向けた、発声・発語訓練。早期摂食訓練に向けた摂食嚥下訓練の実施。不安に対して食事の注意点指導実施。

管理栄養士：栄養状態の管理、食形態の検討。偏食に対しての対応検討。不安に対して、偏食に対応した栄養指導実施。

歯科衛生士：口腔内ケア、口腔内トラブルの予防。不安に対して口腔ケアの指導。

医療ソーシャルワーカー：ご本人・ご家族の相談支援、心理的サポートを実施。不安に対して、在宅サービスの調整。

ケアスタッフ：生活援助、ラウンドで体調変化の早期発見、精神的サポート実施。

薬剤師：調剤・服薬管理、効果と副作用のモニタリングを実施。

【入院時と退院時の評価】 <FIM>運動 入院時：13点→退院時66点

認知 入院時：9点→22点